com/c/TokyoCollege/featured)°

ウクライナ侵攻 世界の視点 欧米以外の「国際社会」の声を聴く グローバルヒストリー

――多様性の背後にある歴史経験

多様な見解を、それが生まれる歴史的背景から読み解く。「国際世論」が数多くある。G7とは異なる国々が抱くしかし、そこではすくい上げられないりースをたどると、欧米メディアからの発信が圧倒的だ。日々大量に流れるウクライナ関係の報道だが、

東京大学東京カレッジ長

羽田正

東インド会社とアジアの海」など。 では、まさし、パリ第三大学博士課程進はねだ、まさし、パリ第三大学教授などを経学、Doctorat de troisième cycle (Etudes学、Doctorat de troisième cycle (Etudes学、Doctorat de troisième cycle (Etudes学、Doctorat de troisième cycle (著書)

ブ・チャンネルで公開している。(https://www.youtube. である。インタビューの動画は、東京カレッジでは、二月 に「ウクライナ危機を見る複数の眼」と題するインタ にユー・シリーズを企画した。中東、アフリカ、南アジア、 デンアメリカを主要な研究フィール にカまったロシアによるウクライナ侵攻を受けて、 である。インタビューの動画は、東京カレッジでは、二月 私が責任者を務める東京大学東京カレッジでは、二月

> 三月末のことだった。 この企画が頭に浮かんだのは、侵攻から一ヵ月が経った

方の支持を得ていた。私もロシアの侵攻は厳しく非難され

かしら釈然としないものを感じていた。るべきだと思った。しかし同時に、この一連の報道には何

動向にも触れるべきではないか。とヨーロッパだけが国際社会ではない。他の国々の反応やり上げ方の偏りは今回に限ったことではないが、アメリカリカとヨーロッパの主要国に限られていたことである。取りかとヨーロッパの主要国に限られる「海外」の反応が、アメ

関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるようにというのは、分析が甘いのではないだろうか。 というのは、分析が甘いのではないだろうか。 関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように関連して、情報の伝え方や分析にも問題があるように

て、専門家の解説を聞きたい。これが連続インタビューを欠席となるのだろう。北米やヨーロッパ以外の地域につい国も棄権している。これらの国々の対応が、なぜ、棄権やタン、バングラデシュ、スリランカ)や多くのアフリカ諸上げられた。しかし、南アジアの主要国(インド、パキス上げられた。

国連決議と制裁にみる各国の対口姿勢の違い

企画した理由である。

大回のインタビューはきわめて興味深く、さまざまなこれでおきたい。大回のインタビューはきわめて興味深く、さまざまなこれでおきたい。

1. 三月二日と二四日のロシア非難の決議、四月七日のロシアの人権理事会理事国資格停止決議の投票に至るまでの国連総会での各国代表の発言記録を読むと(https://digitallibrary.un.org/record/3968824?ln=en, https://digitallibrary.un.org/record/3966630?ln=en, https://

中国が棄権したことは、

メディアでもかなり大きく取り

られてきたイスラエルやUAE)が相当数に上ることには

席した国の多くも、今回の武力行為を憂慮していることがかかる。直ちに停戦することを呼びかけたり、国際的に承認された国家の領土に武力を用いて侵入しその主権を犯すいかからず、これらの国々は、G7やEUを中核とするヨールかわらず、これらの国々は、G7やEUを中核とするヨーロッパ諸国と一緒になって行動することは控えた。また、インタビューでの専門家の説明によるなら、賛成した国の中にも温度差があり、必ずしもすべての国がもろ手を挙げて決議案に賛成したわけではなかった。ラテンアメリカのように戦争の現場から遠く当事国との経済的なつながりがように戦争の現場から遠く当事国との経済的なつながりがように戦争の現場から遠く当事国との経済的なつながりがある。

3. 以上から、世界に注意が必要である。

る。 「ロシア対その他」に二分されているの他の国々は、 を有していること、しかし、その多くは制裁を主張す にとがわかる。日本のメディアが強調するほどに、世界は にとがわかる。日本のメディアが強調するほどに、世界は にこかったヨーロッパ諸国の陣営に加わるには至っていない を本 には至っていない。基本 がな対立は、当事者のウクライナ、かつてソ連の脅威に直 がな対立は、当事者のウクライナ、かつてソ連の脅威に直 がな対立は、世界のほとんどの国が今回の戦争に重大な にまする。

4. 歴史を振り返ってみると、ロシアとG7(カナダはイを放えして続として続いる。旧帝国同士の争いが一○○年を越えが変わったとはいえ、旧帝国同士の争いが一○○年を越えよって期せずして明るみに出たことの一つは、組み合わせ次世界大戦までの間の植民地帝国である。今回の戦争にギリス連邦の一国とする)はすべて、一九世紀末から第二年の大学を表して続いているということだ。

よく主張してきた。古くは日本の大東亜共栄圏がそうだし、いて介入や侵攻の正当性や「維持されるべき現状」を都合これらの旧帝国は、争いが起こるたびに自らの利害に基づらがめられる国際規範」『アジア時報』二〇二二年五月号)、週井啓子が指摘するように(「「侵攻」をめぐる二重基準

とするのは自然なことであるようにも思える。 とするのは自然なことであるようにも思える。 とするのではないだろうか。だとすれば、これらの国々がロシなのではないだろうか。だとすれば、これらの国々がロシなのではないだろうか。だとすれば、これらの国々がロシアとG7のどちらにも付かず、その対立から距離を取ろうとするのは自然なことであるようにも思える。

は、 5 61 る。 と非帝国諸国のそれに転化しかねない点に注意が必要であ が喧伝され、この二大国の角逐が今後の世界の趨勢を決め 再確認するためのものでもあったのではないか。 治的近さとは別に、 連総会決議における中国の棄権は、 までは旧帝国に侵攻される側だったということである。 あったのに対し、中国は清朝末期から中華人民共和国設立 ると言われることが多いが、この両国の対立は旧帝国諸国 非帝 しかし実は両者には一つ大きな違いがある。歴史的に しばしばロシアと中国の近さを強調する論調が見られ ロシアがソ連時代も含めて一貫して旧帝国の立場に 国諸国の間での中国の影響力を軽視すべきではな 非帝国諸国としての自らの立ち位置を ロシアとの地理的 米中対立 玉 政

6. さらに長いタイムスパンで見れば、旧帝国諸国がこれ

紀に入ると中国やインドのように大きな経済力、政治力をは明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界秩序は明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界秩序は明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界秩序は明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界秩序は明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界秩序は明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界秩序は明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界秩序は明白だ。だとすれば、過去一世紀以上にわたる世界代別が、政治力を

旧帝国/非帝国の対話から生まれる新秩序へ

持った国も増えてきている。

以上を考慮すると、今回の戦争は世界全体の秩序や規範以上を考慮すると、今回の戦争は世界全体の秩序や規範以上を考慮すると、今回の戦争は世界全体の秩序や規範は上を考慮する新しい国家の形を築き上げている。この理念と政体のする新しい国家の形を築き上げている。この理念と政体のする新しい国家の形を築き上げている。この理念と政体のする新しい国家の形を築き上げている。この理念と政体のは値を信じ、謙虚に誠実に真摯に非帝国諸国との対話を続けることによって、旧帝国諸国による押しつけではない新価値を信じ、謙虚に誠実に真摯に非帝国諸国との対話を続けることによって、旧帝国諸国による押しつけではない新しい世界秩序を作り上げることができるのなら、それはむしい世界秩序を作り上げることができるのなら、それはむしい世界秩序を作り上げることができるのなら、それはむしい世界秩序を作り上げることができるのできた時代の表示といい。●